

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320170

研究課題名(和文) 淀川流域における古墳群形成過程の再検討

研究課題名(英文) Reconsideration about the formation process of mounded tomb groups in Yodo river basin

研究代表者

上原 真人(uehara, mahito)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70132743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、淀川流域における古墳群形成過程を再検討することにあった。具体的には、茨木市青松塚古墳出土資料の再検討をおこない、その歴史的意義を考察した。研究の結果、青松塚古墳から出土した副葬品(青銅鏡、馬具、武器、装身具、須恵器)、円筒埴輪やさまざまな形象埴輪(家・蓋・盾・人物)は、日本列島における古墳時代後期の文化や社会を知る上で貴重な考古資料であることを明かにした。また、横穴式石室の構造や青銅鏡・馬具などの遺物は、淀川流域と東アジア世界との関係を考える上でも重要であることを指摘することができた。

研究成果の概要(英文)：This study project aimed to reconsider the formation process of mounded tomb groups in Yodo river basin. Especially, we tried to analyze the artifacts excavated from Seisyo-zuka tomb, Ibaragi city, Osaka prefecture. As the result of this study, we demonstrated that the grave goods of this tomb (bronze mirrors, horse trappings, weapons, accessories, Sue ware and so on) and cylindrical Haniwa and some kind of representational Haniwa (house, sunshade, shield, human figure and so on) excavated from Seisyo-zuka tomb were useful for understanding mounded tombs and the society of later Kofun period (6th century) in Japan. We also found that the structure of corridor-style chamber and some of grave goods (especially bronze mirror and horse trappings) were useful for understanding the relationship between Yodo river basin and East Asia.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 古墳時代 横穴式石室 青松塚古墳

1. 研究開始当初の背景

淀川流域は、西日本と東日本の結節点にあたるという地理上の特性から、日本列島の歴史の上でも重要な役割を果たしてきた。特に古墳時代においては、淀川右岸に位置する三島地域(大阪府高槻市・茨木市・吹田市・摂津市・島本町)において、さまざまな古墳が築造された。三島地域の中では、古墳時代を通じてさまざまなパターンで古墳群が形成されており、その動向には、当時の政権中枢との直接的な関与が想定されてきた。また、墳丘に立て並べられた埴輪や、埋葬施設に収められた副葬品の中には、日本国内はもとより、中国大陸や朝鮮半島との関係を知りうる手がかりとなるものが少なくない。

以上のような条件を有する三島地域における古墳群の形成過程を多角的に分析・研究すれば、古墳時代の地域首長権のあり方や、政権中枢と地域首長権の関係、地域への舶載遺物の流入過程などが解明できると期待される。こうした研究を推進するためには、三島地域における古墳関連の基礎資料を整備する必要がある。しかし、過去に発掘調査がおこなわれ、その重要性が認識されてきたにもかかわらず、諸般の事情により現在でも報告がなされていない古墳は少なくない。今後の研究の進展のために、こうした古墳資料を現在の研究水準によって再整理し、それを報告して研究者の間でその成果を共有することが強く望まれた。

2. 研究の目的

以上のような学術的背景をもとに、本研究は、京都大学が保管する青松塚古墳出土資料や南塚古墳出土資料など、過去に調査され学史的に重要な位置を占めながらも、未報告である資料の整理検討と、関連する古墳に対する現地調査を通して、三島地域の古墳に関する基礎資料を蓄積・整備すると共に、日本列島内のみならず、中国大陸や朝鮮半島における考古資料の展開や政治動向を視野にいれつつ、淀川流域における古墳群形成過程の特質と歴史的意義を明らかにすることを、本研究の目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を果たすために、本研究では、青松塚古墳の実態を明らかにすることを中心課題とし、具体的に以下のような方法により研究を進めることにした。

(1) 青松塚古墳出土資料の再検討

1947年に発掘調査され、出土遺物の一部については、学史的に重要な役割を果たしたにもかかわらず、その全容が不明であった青松塚古墳出土資料を、整理・検討して報告をおこなう。出土遺物には、石室内から出土した土器(須恵器・土師器)、鉄器類(馬具・武器・農工具)、各種装身具(玉類・耳環類など)がある。また、墳丘に立て並べられた

と思われる埴輪(円筒埴輪・形象埴輪)が、石室内やその周辺で採集されている。これらの遺物は、京都大学と茨木市教育委員会が所蔵・保管している。今回は、主に京都大学保管遺物を整理して、実測図作成および写真撮影をおこなう。さらに必要な遺物については、各種の理化学的分析をおこなう。茨木市教育委員会所蔵品については、茨木市史の編纂時の整理成果の提供を受け、総合的な検討をおこなう。

(2) 青松塚古墳の測量調査および発掘調査

1947年度の発掘調査に関わる実測図面・現場写真を整理し、当時の発掘調査の実態を明らかにする。さらに、現状での横穴式石室および墳丘の測量調査をおこなった上で、石室の再発掘をおこない、実測図の作成や写真撮影などにより、横穴式石室の構造を記録する。また、トレンチ調査を通して、墳丘規模および築造方法を明らかにするための情報を得る。

(3) 考古資料を通じた三島地域と周辺地域との関係の考古学的検討

青松塚古墳をはじめとする、三島地域の後期古墳に関する特徴的な遺構・遺物を取り上げ、それらを日本列島内の他地域や、東アジア各地の資料と比較することにより、当該地域における古墳群形成過程を、より広い視野により検討する。

4. 研究成果

(1) 青松塚古墳出土資料の再検討

今回の研究を通して、京都大学と茨木市教育委員会が保管してきた1947年発掘調査時の出土資料に、2013年の発掘調査により出土した資料を加えて、実測図の作成・写真の撮影をおこない、その全容を明らかにした。

2面の青銅鏡のうち、画紋帯神獸鏡は、図像の特徴および形態の特徴から、踏返模倣鏡の南北朝鏡であることが確認された。もう1面の乳脚紋鏡は、X線画像の分析を通して、曲線の脚が旋回状に伸びる巴形をなす乳脚紋鏡e類であると判断された。

馬具としては、轡(f字形鏡板付轡・環状鏡板付轡・不明轡)・鞍・鐙(輪鐙・木心鉄板装壺鐙(2種類?))・馬鐸・剣菱形杏葉・辻金具・飾金具などの存在が明らかになった。轡や輪鐙の種類からみて、2セット以上の馬具が副葬されたと推定された。

武器には、刀・ホコ・鉄鏃がある。振り環頭および水晶製三輪玉の存在から、3点以上の存在が推定される刀のうち1点は、いわゆる振り環頭大刀であることが明らかになった。ホコは2点分が確認された。鉄鏃は88点以上が確認された。その殆どは片刃形・柳葉形の長頸鏃であり、その一部は、金具が確認された鞆に納められていたと考えられる。

農工具には、袋状鉄斧・刀子・鑿が副葬されたことが確認された。

装身具のうち、水晶製の玉としては、切子玉と平玉がある。特に切子玉の場合、長さが4 cm を越える大型品が存在することが注目される。この他、ガラス製小玉や銀製空玉が確認された。耳環には、銅芯鍍銀耳飾と銀製耳環がある。

須恵器には、蓋鉢・高杯・ハソウ・小型壺・提瓶・横瓶・広口壺・高杯形器台などがある。出土状況を見ると、袖部付近にあたる玄室南東部、および羨門付近にあたる玄室南西側に、蓋杯を中心とする集中部分があり、奥壁側には高杯形器台などの大型品が分布する傾向が指摘できる。器種ごとに検討を進めた結果、須恵器の型式はTK10型式～TK209型式にわたると判断された。こうした型式差と出土状況との関係を検討したが、異なる型式のものがほぼ同じ位置から出土した例もあり、追葬の有無やその回数を明確に復原することができなかった。土師器高杯は、玄室玄門付近にまとまって見つかった。

石室外からみつかった遺物としては埴輪がある。2013年の調査により、以前より存在だけが伝えられてきた円筒埴輪の存在が確認された。出土資料の中には、普通円筒埴輪と共に、朝顔形円筒埴輪が含まれる。また、形象埴輪には、家・蓋・盾・石見型・人物などがあることが明らかになった。

(2) 青松塚古墳の測量調査および発掘調査

茨木市教育委員会と北大阪けいさつ病院の協力の下、2012年夏に横穴式石室の現状での実測、および墳丘の測量をおこなった。その調査成果をもとに、2013年夏に、横穴式石室の再発掘、および墳丘のトレンチ調査を実施した。

調査前、横穴式石室には多量の土砂が流入していた。それを除去することにより、本石室の玄室が、幅・長にくらべてかなりの高さがある構造であることを確認することができた。また、玄門よりやや羨門側に石を積んで段差をつくり、そこから、羨道は天井石・床面ともゆるやかに上方にあがっていく構造をもつことが明らかになった。こうした横穴式石室の構造については、実測図を作成すると共に、各部の写真撮影をおこない、構造的な特徴を記録した。また、業者委託により3次元測量もおこなった。

墳丘については、石室主軸に直交するように、玄室の東側と西側にトレンチを設定して、墳丘の範囲および構造を追求した。東側調査区においては、後世の攪乱により、墳丘盛土と思われる土層は確認されなかった。しかし、想定される墳丘下半にあたる部分で円筒埴輪がまとまって出土し、墳丘に埴輪が立て並べられたことが明らかになった。西側調査区では、墳丘裾部が存在したと思われる部分が、広範囲に大きく破壊されたことが明らかになった。一方、石室に近い部分では、石室の堀方肩部と、その上方の盛土の一部が確認された。

以上のような調査により、青松塚古墳の石室は、西から東に傾斜する斜面に直交するように深い墓壇を掘り、その中に玄室の2分の1から3分の2程度が収まるように石室が築造されたことが明らかになった。墳丘の規模・構造を明確にする手がかりはほとんど得られなかったが、墳丘下半は地山を成形し、上半は玄室上半を覆うように盛土がなされたと推定される。埴輪は円筒埴輪であると考えて良く、埴輪の存在から、2段築成であったと推定される。

(3) 考古資料を通じた三島地域と周辺地域との関係の考古学的検討

今回の研究で整理・検討作業をおこなった出土遺物や調査遺構を手がかりとして、青松塚古墳の三島地域における位置づけや、周辺地域との関係について、研究分担者による調査研究を進めた。

まず青銅鏡については、中型の中国鏡と小型の倭鏡を横穴式石室に副葬する例が、千葉県金鈴塚古墳・群馬県高崎観音塚古墳・熊本県国越古墳などにも確認されることを明らかにした。そして、そのような副葬パターンの背景には、当時の政権中枢と、各地域の有力被葬者の間における、複雑な政治関係の存在が想定された。

馬具については、今回の整理を通して、青松塚古墳に副葬された馬具のうち、f字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を中心とする馬装の具体的な様相を明らかにすることができた。また、鞍・飾鋏・辻金具・鐙などに付着した木質・漆塗膜・皮革・繊維・樹皮については、試料を採取して検鏡標本を作製し、材質・構造の観察をおこなった。

横穴式石室については、三島地域のみならず、近畿地方における初期石室の1例としての位置づけをどのようにおこなうべきかについて、基礎的な検討をおこなった。また、近畿地方における横穴式石室受容の背景として、在地的な要素に注目する最近の研究動向に対して、百済や加耶における状況との比較検討作業を通して、対案を提示することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

阪口英毅、「元稻荷古墳の副葬品組成の概要と評価」、『元稻荷古墳』(向日市埋蔵文化財調査報告書) 査読無、第101集、2014、pp.191-200

諫早直人、「馬具の有機質 七観古墳出土馬具の分析結果から」、『七観古墳の研究 1947年・1952年出土遺物の再検討』、査読無、2014、pp.233-248

諫早直人、「高句麗の蹄鉄 最古の蹄鉄をめぐると一試論」、『ユーラシアの考古学』、

査読無、2014、pp.1-15
上野祥史、「中国鏡」、『古墳時代の考古学』、
査読無、4、2013、pp.15-30
上原真人、「撓柄タワメ工斧の提唱」、『技
術と交流の考古学』、査読無、2013、pp.278
- 285
諫早直人、「馬具の舶載と模倣」、『技術と交
流の考古学』、査読無、2013、pp.348-359
吉井秀夫、「日本列島の中の百済文化」(韓
国語)、『アジアの古代文化交流』(中央文化
財研究院学術叢書)、査読無、4、2012、
pp.43-60
諫早直人「生産と流通 馬具」、『古墳時
代研究の現状と課題』下、査読無、2012、
pp.129-149
吉井秀夫、「朝鮮半島諸国と古墳文化」、『古
墳時代の考古学』査読無、7、2012、pp.73-84
諫早直人、「馬匹生産の開始と交通網の再
編」、『古墳時代の考古学』、査読無、7、
2012、pp.170-182
上野祥史、「金鈴塚古墳出土鏡と東国の古
墳時代後期社会」、『金鈴塚古墳研究』、査読
無、創刊号、2012、pp.5-28
阪口英毅、「鉄製品」、『講座 日本の考古学』、
査読無、8、青木書店、2012、pp.124-147
上原真人、「青谷上寺地遺跡出土の木製農
工具の特色」、『青谷上寺地遺跡出土品調査
研究報告』、査読無、8、2012、pp.186-202
阪口英毅、「七観古墳の概要」、『国立歴史
民俗博物館研究報告』、査読有、第 173 集、
2012、pp.245-259
阪口英毅、「1947年・1952年出土遺物の概
要」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、査読
有、第 173 集、2012、pp.293-314
上野祥史、「帯金式甲冑と鏡の副葬」、『国
立歴史民俗博物館研究報告』、査読有、第
173 集、2012、pp.477-498
諫早直人、「統一新羅時代の轡製作」、『文
化財論叢』、査読無、2012、pp.991-1012
吉井秀夫、「百済の冠と日本の冠」(韓国語)
、『百済の冠』(国立公州博物館研究叢書)
査読無、第 24 冊、2011、pp.70-77
上野祥史、「弥生時代の鏡」、『講座 日本
の考古学』、査読無、6、2011、pp.273-295
上野祥史、「青銅鏡の展開」、『弥生時代の
考古学』、査読無、4、2011、pp.139-154

〔学会発表〕(計 6 件)

吉井秀夫、「横穴系墓制の受容様相を通し
てみた三国時代墓制の変化とその歴史的背
景」、『シンポジウム『三国時代国家の成長と
物質文化』、2013年11月29日、韓国学
中央研究院・城南市(大韓民国)
上野祥史、2013「萬義塚1号墳出土倭鏡と
倭韓の相互交渉」、『シンポジウム『海南玉泉
萬義塚古墳国際学術大会』、2013年11月28
日、東新大学文化博物館・羅州(大韓民
国)
諫早直人2013「日韓初期馬具の比較検討」
、『第1回共同研究会 日韓交渉の考古学

古墳時代』、32-47、2013年11月17日、
福岡大学
吉井秀夫、「百済陵墓の構造・性格と日本
陵墓の比較」、『シンポジウム『百済の陵墓と
周辺国陵墓の比較研究』、2013年4月5日、
韓国伝統文化大学校伝統文化研究所・扶餘
郡(大韓民国)
吉井秀夫、「墳墓の構築過程からみた三国
時代墳墓の比較研究」、『シンポジウム『三国
時代国家の成長と物質文化』、2012年11
月23日、韓国学中央研究院・城南市(大韓
民国)
諫早直人2012「九州出土馬具と朝鮮半島」
、『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、
89-121頁、第15階九州前方後円墳研究会、
2012年6月16日

〔図書〕(計 1 件)

上野祥史他、六一書房、『祇園大塚山古墳
と5世紀という時代』(「祇園大塚山古墳の
画文帯神獸鏡 同型鏡群と古墳時代中期
」) pp.107-134

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上原真人(UEHARA, Nahito)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70132743

(2) 研究分担者

吉井秀夫(YOSHII, Hideo)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90252410

阪口英毅(SAKAGUCHI, Hideki)

京都大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：50314167

上野祥史 (UENO, Yoshihumi)
国立歴史民俗博物館・准教授
研究者番号：90332121

諫早直人 (ISAHAYA, Naoto)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財
研究所・研究員
研究者番号：80599423

(3)連携研究者

()

研究者番号：